ぼくのパンダ号

文：西　純子
絵：鎌倉麻衣

sample

〜この本を手にしていただいた方へ〜
ご購入いただき、ありがとうございます。

はじめに

この物語は、自分が小さな時の夢をもりこんでみました。
私の住む街のとある大きなマンションの横に小さな公園があり、そこにポツンとパンダの乗り物がありました。コロナ過で子供達のいない公園、パンダの乗り物がやけに寂しそうでした。そんな現実視せざるを得ない世の中ですが、子供達が楽しい夢を観て、素晴らしい明日を想像できるようになれば良いなと思いこの絵本を書きました。
この物語を親子で一緒に読んでいただけると嬉しいです。

sample

ぼくが すんでいるマンションの となりに、ちいさな こうえんが あるるんだ。
そこには ぼくの だいすきな パンダの のりものが あるるんだ。
ぼくは いつも、パンダの のりものを パンダ号と よんでいるんだ。
ぼくのパパは、いつも おしごとで いそがしいから
ぼくは いつも ひとりで パンダ号に のって あそんでるんだ。
ぼくね、パンダ号と おはなしするんだよ。

「パンダ号 ぼくのパパはね、おやすみのひに
いっしょに あそんでくれるって やくそくしても、
おしごと いそがしいからって
いつも やくそくを まもってくれないんだよ。」
「パンダ号 でもね、こんどね、パパが ぼくの たんじょうびに ぜったい、
ぜったい、ゆうえんちに つれてってくれるって やくそくしたんだ。」
そういって アトムくんは、おうちにかえっていきました。

sample

そして、アトムくんの たんじょうびの まえのよる、
パパが おしごとから かえってきました。
アトムくんは、あしたの たんじょうびが たのしみでなりません。
「パパおかえりなさい！
あした ゆうえんちに つれってってくれるよね！」
と、アトムくんは パパにききました。

パパは、とても こまった かおをして アトムくんに いいました。
「アトム、パパね、あした どうしても、
おしごと やすめなくなったんだ…ごめんね。」
それをきいた アトムくんは なきだして
「ぜったい、ぜったい ゆうえんちへ つれってってくれるって
パパ やくそくしたじゃない！　パパなんか きらいだー！」と、
おおごえで なきながら、いえを とびだしてしまいました。

sample sample

アトムくんは なきながら、こうえんへ かけていきました。
こうえんに つくと、アトムくんは パンダ号の のりものに すわり、
パンダ号に いいました。
「パパね、こんどこそゆうえんちへ つれてってくれるって
いってたのに、また おしごとで いけなくなったんだよ。」
「パパなんて きらいだ！ パパなんて きらいだ！」
アトムくんは なきながら なんども なんども いいました。

そして アトムくんは、たくさんないて ねむたくなって
いつのまにか パンダくんの せなかで、ねてしまいました。
それから、どれくらいたったのか…
「アトムくん、アトムくん。」
だれかが アトムくんを よんでいます。
アトムくんは、めを こすりながら まわりを きょろきょろ…

sample sample